

日仏演劇協会2013年度講演会報告

ミュッセ生誕200年記念国際シンポジウム

—ミュッセティストたちの21世紀—

鹿瀬 颯枝

21世紀に入ると同時に盛んになったロマン派の生誕200年は、ヴィクトル・ユゴー、アレクサンドル・デュマ、ジョルジュ・サンド、そしてアルフレッド・ド・ミュッセと続く。フランスでは、記念公演、記念出版、記念シンポジウムと行事が目白押しであったが、日本では、ミュッセを語る行事など皆無に等しい。そこで、ミュッセティストの端くれとして、2010 - 2011年度に盛大に行われたミュッセ生誕200年記念行事について報告する義務があると感じた。

今時、ミュッセなんて古い、黴臭い、集まる人たちはノスタルジックな年配研究者の輩にちがいないと少しでも思われた方々に伝えたい。2010年8月14日～21日の一週間に渡り開催された国際シンポジウム¹⁾は、若手研究者がほとんどであり、最年長は、ソルボンヌ大学のフランク・レストランガン教授と私であった。言い換えると、ミュッセ研究に関しては、80年代の私の指導教授たち、故アンヌ・ユベルスフェルト教授（ソルボンヌ大）、バルナール・マッソン教授（ナンテール大）の時代から完全に世代交代をしており、今回の招待者リストは、80年以降にミュッセ、ロマン主義、およびその周辺をテーマに博士論文の執筆者リストから選んだようだった。昨年3月にルーアン&ル・アーヴル大学出版局よりコレクション《コロック・ドゥ・スリジー》の一つとして出版された『ミュッセの詩学』²⁾にも新時代のミュッセティストたちによる新たな研究分野を感じ取ることができる。

ノルマンディーのスリジー・ラ・サル国際文化センターで開催されたシンポジウムは、連日、午前2名、午後2名の発表（各人1時間30分）に絞られ、夜は、参加者有志による一幕物上演³⁾や

ワイン片手に名句引用ゲーム等を通して、ミュッセについて語り尽くすという趣向になっており、至福の一週間を過ごした。唯、最終日に私の研究発表が入っていたので、本当に幸せを感じたのは、やっと解放された帰りの車中であったが。日本では、過去にセゾン劇場で渡辺守章教授訳&演出の演劇史に残る『ロレンザッチョ』⁴⁾を観て、大いに励まされ、勇気づけられたが、それ以降、ミュッセ劇に関するものは、舞台上演も邦訳も耳にしていない。ならばと、拙いなりに抄訳ではあるが対訳⁵⁾を試み、またシンポジウムの招待を受けるなどと孤軍奮闘したのは事実である。

スリジー・ラ・サルでの個々の研究発表については次に述べるとして、先ず、驚かされると同時にさすがミュッセティストの集まりと感心させられたことがある。通常、1～2日で開催され、同時にいくつものジャンルに分かれているので、聴きたい発表を選ばねばならないものだが、今回は、21名の研究発表すべてを一週間かけて参加者全員が無理なく聴けるようにプログラムは組まれていた。また、今回の発表者全員（博論執筆中の院生2名を除いて）、いずれかの大学に属し、教授、准教授であるはずだが、所属も肩書も一切載せずに名前だけが記入されていた。通常、名前より先に所属大学、役職等の肩書がものものしく書き込まれているが、何もないのが小気味よい。さらに、人里離れた会場周辺には羊や牛以外、誰もいないし、何もない（行事がある時しか停まらない駅一つだけ）ので、3度の食事は全員一緒にテーブルにつく。ファーストネームで呼び合い、自己紹介から始まる。各人の宿泊部屋に鍵はない。未だかつて泥棒に入られたことはないと言う。

「私のグラスは大きくないが、私は自分のグラ

スで飲む」と言い切ったミュッセ、観るためではなく読むための芝居を好み、驕りのない詩を綴り、古典主義とかロマン主義とか、いかなる流派にも属することを拒んだへそ曲がり、しかし当時の青年たちが罹った世紀病に自らも罹った世紀児。そんなミュッセの作品を愛する人たちが集まったシンポジウム。主催者に心より感謝であった。生誕200年記念として、大きく掲げたテーマ『ミュッセの詩学 *poétique de Musset*』は、『*Une poétique à rebours*』という表現もミュッセの「さかしまの詩学」というより「へそ曲がりの詩学」と読んだほうが本人も喜びそうだ。シンポジウムのプログラムは、シンプルに発表者のABC順に発表されたが、後で出版の際にはジャンル別に次の5項目に分けられた。

I. 出典と台詞

II. ジャンルごとの詩法

III. 演劇：エクリチュール、ドラマツルギー、演出

IV. 独自のモチーフ、強迫的テーマ

V. 交差する視線

幾つかタイトルだけでも拾ってみると、「ミュッセと中世・ルネッサンス期のイタリア作家たち」、「ミュッセと15世紀の表象」、「翻訳から創作へ、ミュッセの出生証明書」、「ミュッセのメタ・レクチュール」、「ミュッセ劇における庭園の様相」、「ミュッセ：ドラマツルギーと政治」、「ロレンザッチョの謎」、「不調和の美学」、「ミュッセと賭博」、「ミュッセとバルザック」、「ミュッセの忠実なる信者—エミール・ゾラ」、「ミュッセとプルースト、あるいは快樂の詩作」、「ロレンザッチョ、あるいは仮面の人」など、実に多岐にわたる。

この国際シンポジウムの前に、2010年6月25～26日、既にヴァンドームにおいて『ミュッセのテリトリー、現実とフィクション』というテーマで最初のシンポジウムが開催されていた。この後、11月にはパリ大学、翌2011年3月にはルーアン大学でもシンポジウムが予定されており、ミュッセ生誕200年を祝う実に豊かな2010-2011が待っているはずだった。

2011年3月14日、私は成田空港からパリに出發する予定であった。16日にルーアン大学で最後のシンポジウムが開催されることになっていたからだ。しかし、周知の通り、この日は、未曾有

の東日本大震災から3日後、原発の爆発事故、そして「計画停電」の初日。当然のことながら、すべての予定を変更せざるを得なかった。まずは、フランスの関係者に私がルーアンに行けないこと、私自身は無事であるけれど、日本は大変な状況になっていることをメールで知らせた。2日後、シンポジウム当日は日本へのお祈りから始めたもののルーアン大学からの報告。感謝。鍵すら要らない穏やかで幸せな暮らしを共有した仲間たちからの暖かいメールが続いた。⁶⁾

あれから3年、今年4月にパリでルーアン大学の教授の一人に再会した。相変わらず、ミュッセに限らず、ヴィニー、デュマ、サンドとロマン派の作家たちの書簡集の朗読会とか忙しそうであったが、2013-2014年度は、バカロレアの文学部門でミュッセが指定されているので、芝居もあちこちで上演されているという。『ロレンザッチョ』⁷⁾や格言劇『扉は開くか閉じるかしていなければならぬ』⁸⁾が現在上演中。少なくとも今年のバカロレアが終わるまで、パリではこの2作品が観られる。

『ロレンザッチョ』は、私が2000年から関係している9区のテアトル・デュ・ノールウエストで、『扉は開くか〜』は、16区の住宅街にあるテアトル・ラヌラグで上演中。いずれもとても小さな劇場なので予約をしないと満席だ。特にノールウエストには高校生たちがグループで先生に連れられてやって来ていたのが、印象的だった。この小さな芝居小屋は、かつてモリエール、ラシーヌに続いて、ミュッセの全作品を半年間上演⁹⁾したことがある。ミュッセ作品ばかり40年も演じた俳優がコメディイ・フランセーズにはいるのだと教えてくれたのも此処だった。本人の肖像画を見るまで信じられなかったのを覚えている。皆、ファナティック？ 今回は、見知らぬ顔ぶればかりだったけれど、2時間余に短縮して切れの良い演出が一般には好評のよう。古くからの賑やかな劇場街グラン・ブルヴァールにあるのだが、小さくて見落としそうになる。一方、ラヌラグも同様に小さいけれど、上演作品はいつも話題になる。静かな高級住宅街にひっそりと佇み、雰囲気のある劇場で、年間のプログラムを見ても、客層をみても、劇場の建築様式も16区という感じである。

日曜のマチネにぴったり。その後は、近くのブローニュの森を散策しながらマルモッタン美術館でモネを見て、帰宅というのは如何だろうか。

十数年、通っているこの二つの小劇場、共通点は唯一、ミュッセ劇をよく上演しているので発見できたということ。大劇場では味わえない演劇空間に浸れるのだ。朗読会などを通しての出会い、再会も愉しみのひとつ。ノールウエストの劇場主は、昔も今も初演の日には必ず、役者、裏方、関係者全員に一本ずつ赤いバラをプレゼントする習慣を欠かしたことがない。私自身も《シリーズ・ミュッセ》の後、メーテルランク作『闖入者』の初演日に新米の舞台監督として真紅のバラを頂いた。振り返ってみると、私にとってはミュッセを通して大きくなった演劇の輪である。

註

- 1) CERISY, LES COLLOQUES - La poétique de Musset - du samedi 1^{er} août au samedi 21 août 2010, au Centre International de Cerisy-la-Salle
- 2) *La poétique de Musset*, sous la direction de Sylvain

Ledda, Frank Lestringant, Gisèle Séginger, Presses Universitaires de Rouen et du Havre, 2013

- 3) *Il faut qu'une porte soit ouverte ou fermée*
- 4) 『ロレンザッチョ』 訳・演出 渡辺守章、堤真一主演、銀座セゾン劇場、1993年7月1日～24日
- 5) 「劇場への招待席 - ロレンザッチョ」対訳(抄訳) 鹿瀬颯枝、『ふらんす』2005年4月号～2006年3月号連載 (ジェラルール・フィリップ脚色・主演のCD音源付)
- 6) 「ミュッセ生誕200年記念国際シンポジウム日録」鹿瀬颯枝、『聖学院大学総合研究所Newsletter』Vol. 22-1, 2012
- 7) *Lorenzaccio*, au Théâtre du Nord Ouest, 13, rue du Fbrg Montmartre, 75009-Paris
- 8) *Il faut qu'une porte soit ouverte ou fermée*, au Théâtre Ranelagh, 5, rue des Vignes, 75016-Paris
- 9) *Alfred de Musset - Intégrale* (2000), au Théâtre du Nord Ouest, 13, rue du Fbrg Montmartre, 75009-Paris
「21世紀に向かって小さな芝居小屋の大きな挑戦」鹿瀬颯枝、『ふらんす』2001年1月号

